

しんしゅうしゅうか  
真宗宗歌

■ 楽曲データ

歌詞：土呂基 作詞（佐々木信綱 補作）

楽曲：島崎赤太郎 作曲

発表：真宗各派協和会 1923年

初演：—

初出：『宗歌』〔石版摺〕 真宗各派協和会 1923年

管理番号：M1196

■ 創作の経緯

1923（大正12）年、親鸞聖人のご誕生750年・立教開宗700年を記念し、真宗各派協和会（現・真宗教団連合）が発表・制定。歌詞は、公募（1922〔大正11〕年6月～11月）による。約350点の応募作より選ばれたのは、真宗大谷派の僧侶・土呂基（三重県亀山市本宗寺）の作品。歌人の佐々木信綱による補作の後、島崎赤太郎（東京音楽学校教授）が作曲（委嘱）し、翌1923年4月に発表。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第4巻収録

底資料：『佛教讃歌集』本派本願寺 1940年

比較資料：『和英標準佛教讃歌勤式集』本派本願寺内翻譯課 1939年

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

仏教讃歌活用の大きなメリットは、音楽によって仏徳讃嘆ができること、全員が同一の味わいを共感できることです。特にこの真宗宗歌の場合は、「わたくしの信心の喜び」を歌い上げることから、個人としての喜びと、ともに同朋としての喜びとが、温かい共感の世界を広げてゆくことでしょう。

真宗宗歌は、1923（大正12）年の立教開宗700年にあたり、真宗十派が共同歩調をとるために真宗各派協和会（現在の真宗教団連合）を結成し、毎日新聞を通じて作詩公募した際、大谷派の僧侶、土呂基（三重県亀山市本宗寺）により作詞されました。新聞社に勤める文学好きな人であり、そのため3番の一部を除いてほぼ原作に近いものとなっています。1933年11月に40歳の若さで往生されています。

作曲者の島崎赤太郎（1875～1933）は東京音楽学校卒業、ドイツ留学後、東京音楽学校教授となり、オルガン教則本などの他に音楽評論の著書を多く残さ

れています。

1番は「聞法信仰に入るまで」2番は「遇い難い仏法に遇って救われた喜び」3番では「自分の得た喜びを他の人にも伝え広め（大悲伝普化）幸せをともにすること」を歌っています。人生を問い、精神の依りどころを求めて、ひたすら聞法の歩み続けるなかで、阿弥陀さまの智慧と慈悲の光に触れて、人生を生き抜く答えをつかみ、阿弥陀様の大きなお慈悲の中に生かされることの喜びと幸せを歌い上げたものです。より積極的に明るく歌われることが大切です。

法座や集会の最初に歌われることが多く、また楽器演奏のみでは開扉や伝供のBGMとしても活用できます。浄土真宗を代表する歌ですから、唱和する場合は宗歌にふさわしく丁寧な取り扱いをすべきであります。時間の制約により1番3番を歌うのは、歌詞の内容からは非常に不適切なことで、この場合は1番のみにとどめた方がよいでしょう。

#### ◆演奏上の注意

この曲のもつ深い宗教的な感覚を表現するためには、4分音符＝60のテンポで歌う方が作曲者の要求する重厚な感じが得られるでしょう。歌い方では、次のような点にご注意ください。

- ①日本語の曲の特性として「弱起」の形があります。この曲も「深き」の「ふ」、「みのり」の「み」、「あいまつる」の「あ」、「身のさち」の「み」等々、ほとんどの言葉が、小節の4拍目（弱拍）から始まっています。「ふ」「かきみ」「のりにあ」「いーまつ」「る」という風に意味不明の歌にならぬよう、「弱起」の4拍目から次の1拍目にかけてレガートを心がけ、多少クレッシェンドを伴って歌うと良いでしょう。また、「に」「の」などの助詞は、少し弱く歌う方が歌詞の説得力が増してきます。歌詞を正確に伝えることは、歌う人の最も大切な役割です。
- ②1番の「たとうべき」と2番の「くらぶべき」を混同しないように。
- ③「たとうべき」は文語調なので「たとーべき」と歌います。
- ④「ふかき」の「ふ」、「ひたすら」の「ひ」など「ハ行」の発音をしっかり（特に「ふ」は「Hu」ではなく「Fu」）。
- ⑤「ききひらき」のド#がレにならないように。
- ⑥2番の「よのなりわいに」の「の」は1番、3番と異なり2拍であること。
- ⑦付点4分音符が長すぎたり、8分音符が短すぎたりしないこと。
- ⑧ブレスの前の音が短すぎたり乱暴になったりしないように。
- ⑨混声四部合唱譜を伴奏に使用することができます。低音をよく響かせて荘厳な感じを保ってください。
- ⑩できるだけピアノかオルガンの伴奏を用意したいものです。前奏には、最後の4小節（アウフタクトを含む）をあてることができます。
- ⑪宗歌という意味では、暗譜（楽譜をもたない）で歌えるよう心がけましょう。

解説執筆：仏教音楽研究所 [現・総合研究所（仏教音楽・儀礼研究室）]

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No.4（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第129号収録）を加筆・修正の上、転載。

Copyright : Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.